松任谷正隆の

僕のひとりごと 19

VOL.19　京都の家

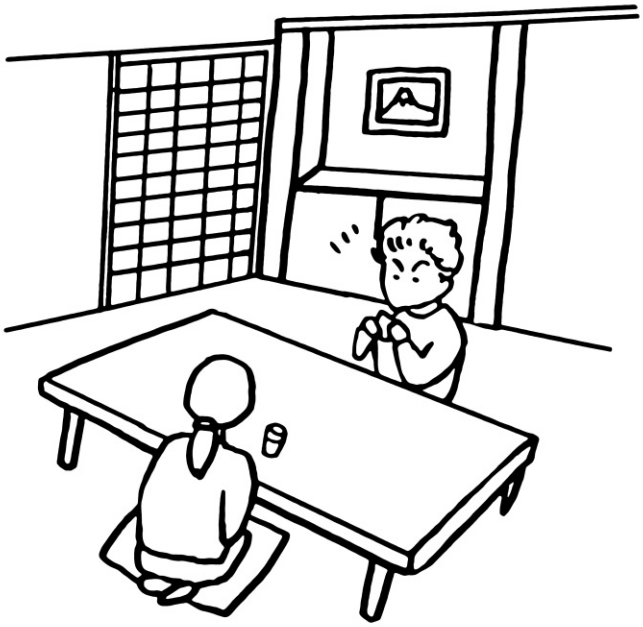
また、中学１年この頃に遡ってみよう。
あれは家族で九州旅行をし、帰りに台風だか大雨だかの影響で大阪まで這々の体で辿り着き、祖母の一言で、
京都に新築したばかりの叔父（鎌倉の伯父の弟）の家に一泊だけした時のことだ。
僕はあのときが京都は初めてだった。

伊丹空港まで（懐かしい！）叔父がクルマで迎えに来て、祖母、母、僕、弟で乗り込んだ。
ま、定員いっぱいである。道中は殆ど覚えていないが、京都市内に入ると風景がガラッと変わったのは覚えている。
途中で誰かがお寺巡りをしよう、なんて言いだし、仕方なしに付き合ったのだが、
嫌嫌行ったそんな場所がいまだに記憶に残っているのだから、
人間の記憶というのは不思議なものだ。

ようやく辿り着いた叔父の新築の家は山の上の方に建っていた。
たいして大きな家ではなかったが、小さくもなかった。
鎌倉の伯父と同じようにカメラ好きだったらしく、
居間には当時発売されたばかりの、瞬きしない１眼レフの
キヤノンペリックスが燦然と輝いていた。
叔父は僕らをその家に送り届けた後、確かもうひと仕事あって、
仕事場に戻り、僕たちはその家で何をするでもなく、
ボーッとしていた。

遠くで、例によって祖母が母にいろいろな話をしているのが聞こえた。
母はいつも聞き役。だから祖母が一方的に喋る。
どうやら叔父の結婚式はすぐらしいのだが、その相手の家のことが気にくわないらしい。
もっと言えば、そのお嫁さんのことも気に入らないらしい。
それでも、ここに越す前は変な女に捕まっていて、ようやく別れさせることが出来てよかったよかった、
ということらしい。

新築の、畳の香りと、漆喰の独特の香りが入り交じった６畳程度の客間とこんな話題が僕の頭にこびりついた。
考えてみれば、この家はそんな新婚夫婦が暮らすための家であり、
そういえば家の中心付近に大きなベッドルームがあった。ダブルベッドを見るのは初めてだった。
弟はどちらかというと、このピンク色のベッドルームの印象がやたら（セクシーで）強烈だったらしく、
つい最近、叔母（この時はまだ婚約中だったけど）にそのことを伝えたら叔母の顔色は明らかに曇っていたから、
あまり触れてほしくなかった事情でもあったのだろう。
ちなみに叔母はその後、裸婦とかかなり際どい絵を
描くようになっていったから、かなり発展的な
考え方の持ち主でもあったと思う。
その晩、６畳間に４人分の布団を敷き、祖母の母に
話す声がそろそろ子守歌みたいに聞こえ始めたころ、
ガタガタと音がして叔父が帰ってきた。
そうとう酔っぱらっているらしく、ふらふらだった。
祖母が起きだして叔父を介抱した。
あのピンク色のベッドルームで寝るんだろうか、
と思うとなんだかしっくりこなくて、その先の
結婚生活を子供心に心配したのを覚えている。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。
4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。
20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、
バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。
その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。
鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。
2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。
日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。
著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy